



尾道の歴史と遺跡シリーズ7

港町尾道

みなとまちおのみちとちゅうせいとうじき

中世陶磁器

令和2年3月

尾道市教育委員会



印花双鳥文白磁碗

尾道が港町としての役割を担うようになったのは、平安時代の嘉応元年（1169）に大田庄の倉敷地に指定されたことがきっかけでした。当時は、世羅郡を中心とした大田庄（おおたのしょう）という荘園がありましたが、ここでの年貢を船で積み出す場所がありませんでした。そこで、大田庄



に近く、地形が入り組み自然に湾を形成しており船を泊めやすかったため、年貢積み出し港としての機能を果たすようになったのが尾道です。その後は、年貢だけでなく様々な商品も輸送するようになり、ますます港町尾道は発展することとなりました。

中世の港町尾道の記録によれば、山の麓にそって、家が密集して並んでいて、みちのく（東北）や筑紫（九州）地方の船も多くみられると書かれており、現在のように民家が密集し、遠方からの交易船も寄港するなど港町の発展の様子がうかがうことができます。

また、室町時代には、中国や朝鮮との貿易、交流も活発化し、天龍寺船のような交易船や朝鮮からの使者を乗せた船も尾道に寄港しています。当時の交易の痕跡として、港町尾道の地下から発掘された「印花双鳥文白磁碗」があります。これは、中国の元時代に制作された中国の役所用の茶碗で、当時の日本で珍重されていました。この白磁碗は、地下から発掘された日本で唯一の完品の印花双鳥文白磁碗です。尾道の黄金時代を裏付ける貴重な資料です。

尾道遺跡は、平安時代末期の尾道開港から現代にいたるまでの港町尾道の痕跡を良好に残している遺跡です。

本州瀬戸内海沿岸部のほぼ中央に位置する広島県尾道市の市街地中心部、東御所町から尾崎本町に至る一帯の地下約1～4mに埋蔵されています。市街地中心部ほぼ全域に相当する約37.3haを尾道遺跡の範囲として推定しています。

昭和50年から200回を越える発掘調査により、港、商家・民家、寺社、倉庫群などの施設が確認されています。福山市の草戸千軒町遺跡のような面としての把握が困難な状況ではありますが、平安時代末期から現在までの遺構・遺物を明瞭な層位の中で捉えることができる重要な遺跡です。

尾道遺跡からは、数万点の様々な遺物が出土しています。それらのほとんどは、港町尾道に生活していた人々が使用していた品であると考えられますが、別の場所で作られ、港に搬入された物です。遠くは中国や朝鮮半島で作られた物、また、日本でも東海地方や近畿地方、九州から運ばれてきた品々が多数見つかっています。



龍泉窯青磁碗



白磁皿（口はげタイプ）



中国製茶入

特に陶磁器は様々な種類のものが出土しています。中国の宋、元、明時代の青磁、白磁等、朝鮮半島で製作された青磁、白磁、備前焼（現在の岡山県）、瀬戸焼、常滑焼（現在の愛知県）などです。特に中国宋・元時代の龍泉窯で焼かれた青磁や白磁は、当時の中国の重要な輸出品のひとつであり、日本でも珍重され、多くの中世遺跡から見つかっています。物資の集積地である港町には、青磁や白磁を交易品としてだけでなく、生活道具としても使用していたことでしょう。

また、中国製陶磁器は、中世の権力者たちにとって、ステータスシンボルでもあり、特に砧青磁などは、代々受け継がれ、現在は重要文化財となっているものもあります。

尾道遺跡から出土した中国製陶磁器には、青磁碗・皿、白磁碗・皿、青白磁合子、青花碗・皿、天目茶碗、茶入があります。



朝鮮青磁



青花碗



印花双鳥文白磁碗

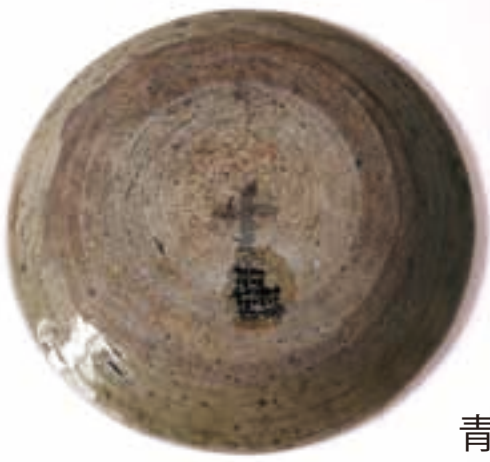
《枢府窯 すうふよう》

中国の元時代に景德鎮（現在の中国江西省）において陶磁器が生産されています。器は薄手の物が多く、キメの細かい白磁が特徴的です。

器の内側には、型押しによる唐草、龍、鳳凰、といった浮文様と供に、「枢府」「枢」「府」といった印銘があります。これらは元の政治の一端を担っていた枢密府（すうみつふ）において使用されていたことを示しています。

また枢府窯は、宮中で使用する高級な陶磁器を焼く為、設けられた窯（官窯）でした。これに対して、民窯と呼ばれる窯では、当時はこれを模造するものもありましたが、枢密府に納められた器は厳選に厳選を重ねた最高品質のものばかりだった為、とても模造品が太刀打ちできる品では無かったと言われていました。

ただし、これらの印銘が入った物が日本を始め、東南アジア、中近東の遺跡から発見された例もあり、政府の官品のみということではなく、貿易用にも生産されていたと考えられます。



青磁皿



白磁壺



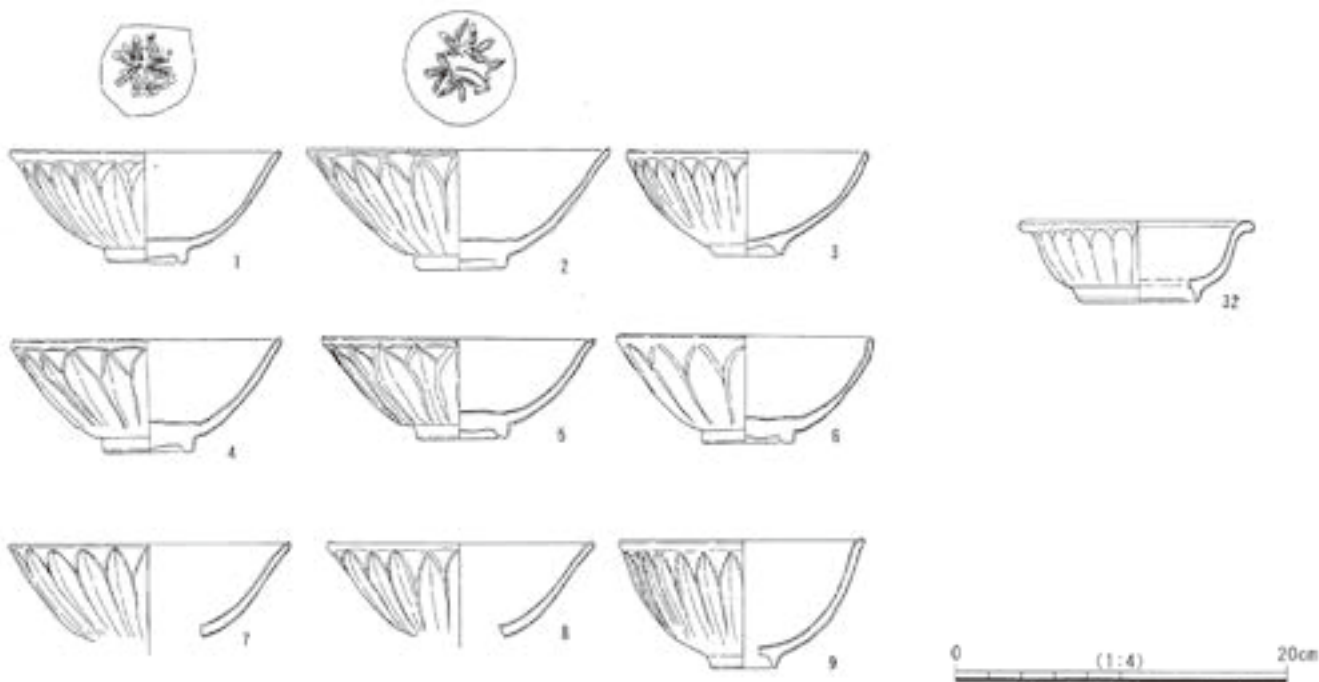
青磁皿



青磁碗

《龍泉窯 リゅうせんよう》

中国浙江省龍泉県西部に存在した数百カ所の陶磁器の窯跡の総称です。10～14世紀、宋、元、明の時代に上質な青磁器を生産し、空前の青磁窯の隆盛を築きました。これらの青磁器は光沢のある緑色の青磁釉がたっぷりとかけられているのが特徴で、どっしりとした質感で大型の花瓶、香炉などに優品が多く見られます。初期には薄い胎土と淡く美しい青緑色が特徴的でしたが、元時代には厚く重厚な物へと推移していきました。尾道遺跡からは青磁器、皿、杯などが出土しています。



輸入陶磁器と尾道遺跡

《備前焼》

岡山県備前市には古墳時代から須恵器窯跡が発見されており、それらが備前焼の元になったと考えられています。窯を急勾配にして、燃烧力を増して焼き絞め、厚くて重厚な釉薬を使わない、現在の「備前焼」の特徴を持つ茶褐色の焼き物が鎌倉時代後期には作られていました。

室町時代初期頃までは壺や甕など、実用的な雑器を中心に製作されていましたが、室町時代中期から後期にかけては、茶陶も作られるようになりました。

また、この頃から、それまでの山土ではなく、田の底土を用いるようになりました。この粘土性の強い黒い陶土を一般に田土と呼びます。粘土性の強い陶土を用いることで、それまでの紐造りによって成型していたものから、下から上に一気に仕上げる一本焼きの成型法が可能になりました。

尾道遺跡をはじめとした中世遺跡、城跡などで壺、大甕、すり鉢、鉢などが出土しています。尾道遺跡では、「備前焼大甕が8個並んだ状態」で発掘されています。店舗などの貯蔵用と考えられます。



すり鉢



壺



《瀬戸焼》

愛知県瀬戸市とその周辺で生産される陶磁器の総称で、日本六古窯の一つです。古くは平安時代から釉薬を使用した陶磁器の生産が行なわれていました。これらは貴族や有力寺院等で使用されていましたが、中国宋朝から輸入された、唐物からものが日本の上層階級に喜ばれるようになると、釉薬を使わない日用品としての器の生産が広く行なわれるようになりました。そうした背景の中で、日本では鎌倉初期から室町中期までの300年間ほど、無釉の器が主流となりましたが、瀬戸窯では無釉の器とは別に、釉薬を使用した「古瀬戸」が生産されていました。

「古瀬戸」は江戸時代末期に生まれた「新製瀬戸」に対し、中世瀬戸の名称として呼ばれています。「古瀬戸」は文様・施釉・成型・器形の多様化など諸点で、鎌倉後期から大きく発展していきました。「古瀬戸」は中世日本において、唯一連続的に上質施釉陶器の生産を続けていました。またその器種の分化は同時代の窯と比較にならないくらい多種多様です。皿、鉢、茶碗は勿論のこと、徳利、香炉、狛犬、卸し皿、仏飯器、等々、百以上の器種の存在が確認されています。

尾道遺跡からも「古瀬戸」の卸皿や壺が出土しており、中世尾道の繁栄を窺い知ることが出来ます。



おろし皿



天目茶碗



壺

《常滑焼 ところなめやき》

愛知県常滑市を中心とし、その周辺を含む知多半島内で生産された焼物の総称で、日本六古窯の一つです。

中世の常滑焼窯跡は1,000基以上に及び、当時、陶器の主要生産地であったことが分かります。平安時代末期には太平洋沿岸部で広く流通しており、鎌倉時代には更にその範囲を拡大しています。広島県福山市においても草戸千軒町遺跡から、中世の常滑焼が数多く出土しており、尾道遺跡からも「常滑焼」の壺や甕の出土が確認されています。

